

「私的な」活動の公的な編成

——プラクティス（練習）のなかのプラクティス——

慶應義塾大学大学院 吉川侑輝

1 目的

本報告の目的は、即興演奏の練習という（ひとりで行われるという意味で）個人的な活動の理解可能性を跡付けていく作業をとおして、一見して「私的」とも思える活動の編成に用いられている公的な方法を明確にすることである。

音楽をめぐる活動を対象としたエスノメソドロジー（EM）研究は、オーケストラのリハーサルや音楽制作といった多様なフィールドで遂行されてきた（Weeks 1982; Brooker and Sharrock 2013）。通常それらの研究は、（ふたり以上で行われるという意味で）集合的な活動における、トークや身体動作といった表現をその主要な分析対象としている。一方、音楽をめぐる活動に参加する人びとの日常において、「練習」を始めとした個人的な活動がその重要な領域を占めていることは明らかだ。こうした一見「私的な」活動を対象とした研究としては、ピアノによるジャズの即興の習得と演奏経験を「現象学的に」（Sudnow 2001: 3）報告した、D・サドナウによる先駆的な業績がある。だがサドナウの方針は直接的に継承されてはならず、それが音楽をめぐる活動を対象とした近年のEM研究といかなるかたちで関係しているかは、それほど明確ではない。

2 方法

そこで本報告は、即興演奏の練習という個人的な活動の理解可能性を、個別事例にそくして経験的に跡付けていく作業を試みる。報告者はまず、自身が日常的に行なっている、鍵盤楽器によるジャズの即興演奏の練習場面を撮影する。次に演奏等のトランスクリプトを作成し、データに示されている志向にそくして、その特徴づけをおこなう。その上で、反復的に産出される現象にかかわるコレクションを構築し、そうした現象に可視性を与えている体系的な方法を特定する。

3 結果

こうして、即興演奏の練習という活動の編成に用いられている方法（の一端）が明確になる。

4 結論

以上の作業を通して、即興演奏の練習という一見「私的な」活動が、公的な方法を通して編成されていることが明らかになる。本報告の試みはまた、音楽をめぐる活動の編成に際して不可欠な「楽音」という表現をいかなる方針において対象化するかについての示唆をもたらすことにもなる。さらには、音楽をめぐる活動を対象とした近年のEM研究が必ずしも主題化してこなかったタイプの活動に着目することで、EM研究の方法論をめぐる省察に資する作業にもなるだろう。

文献

- Brooker, Phillip and Wes Sharrock, 2013, “Remixing Music Together: The Use and Abuse of Virtual Studio Software as a Hobby,” *Ethnomethodology at Play*, Farnham; Burlington: Ashgate, 135-55.
- Sudnow, David, 2001, *Ways of the Hand: A Rewritten Account*, Cambridge; Massachusetts; London: The MIT Press.
- Weeks, Peter, 1982, *An Ethnomethodological Study of Collective Music Making*, Un-published Ph. D. thesis, Department of Sociology in Education, Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto.